

書評

Barbara Watson Andaya. *To Live as Brothers: Southeast Sumatra in the Seventeenth and Eighteenth Centuries*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1993, 324 p.

私がこの本に興味を抱いたのは、研究対象地域が私の研究地域中央スマトラと重なっていることもさることながら、その歴史研究の方法論においてである。

かつての東南アジア史研究は、ベトナム研究など一部の例外を除いて、時にサンスクリット碑文や文献、中国語文献が利用されることはあっても、基本的にヨーロッパ諸語で書かれた文献を資料とする研究だった。ようやく20年ほど前から「現地語」資料の重要性が認識され、タイ研究などにおいて貝葉などの資料が積極的に活用されるようになった。バーバラ・アンダヤの研究の特徴は、たんに「現地語」資料の活用を図るだけでなく、「現地語」資料とヨーロッパ諸語資料の性格の違いを分析の枠組みとしながら、歴史的記述を行うところにある。彼女自身認めているように、この違いに関する認識の仕方は、古典学者ウォルター・J・オングの「声の文化」(orality)と「文字の文化」(literacy)の概念対比に影響を受けている(Walter J. Ong, *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word*. Methuen, 1982; W-J・オング著、桜井直文他訳『声の文化と文字の文化』藤原書店, 1991)。つまり、ことばがもたらす声として機能している文化と、ことばと文字がわかち難く結びついている文化との対比である。アンダヤもこの本の執筆に際して参考としているように、「声の文化」がまだ優勢であった時代のヨーロッパ社会の心性史、さらにはヨーロッパが「声の文化」から「文字の文化」に移ることによって、ヨーロッパの心性にいかなる変化が起こったかについては、すでに多くの研究蓄積がある。しかし、東南アジア史研究においては、こうした蓄積はいまだ乏しいといわざるをえない。この書は、こうしたギャップを埋めるべく企図された野心的な試みの一つである。

アンダヤが、この本で試みるのは、17～18世紀東南スマトラにおける、「声の文化」を代表するパレンバン、ジャンビと、「文字の文化」を代表するオランダ、イギリスとの遭遇・交渉を、両文化から発する資料を渉猟・比較検討することによって記述しようとするところにある。彼女の強調点が、従来の「文字の文化」の資料を基にする歴史記述ではなく、「声の文化」、つまりジャンビ、パレンバンの「現地語」資料から汲み取れる「文化的メッセージ」(cultural messages)を中心に据えたものであることは、歴史研究書としては異例ともいえるこの書のタイトルから想像することができよう。「兄弟として生きる」(To Live as Brothers)とは、東南スマトラにおけるジャンビ王とパレンバン王(両者ともにスルタン)の関係を示したもので、この当時の諸王間関係あるいは主従関係が、通常は兄弟、親子関係などのイディオムを使って表現され、理解されていたこと、そして商業関係さえもが、こうしたイディオムに翻訳されて——たとえばヨーロッパ権力には理解不能であったが、贈物としての女を媒介として商業関係のある種の親族ないし姻戚関係に翻訳することによって——はじめて政治文化的に意味をもつものであったことを示している。これは、文書、帳簿、数字、契約書がますます重要視されるようになっていた当時のヨーロッパにおける権力関係、商業関係とはきわめて異なる世界であった。アンダヤは、けっしてヨーロッパ諸語資料をないがしろにしているわけではない。これらの資料は、本書において縦横に駆使されている。彼女の狙いは、二つの異なる「文化」・「世界」の遭遇を、これまで無視されがちであった「声の文化」のイディオムのレンズを通して理解しようとするところにある。

それでは、ジャンビ、パレンバンにおける「文化的メッセージ」ないしイディオムはなにかであるが、伝承、民話、宮廷文書などに繰り返し表現される、そして一部のオランダ語文献にも言及されているテーマから、アンダヤは三つのメッセージを抽出する。一つは上流(ulu)と下流(ilir)の対比である。内陸と河口、商業産物産出地と貿易港、族長的権力とスルタン、といった対比としても捉えられる。二つ目は、先にも述べた、権力関係、さらには人間関係全般のモデルとしての家族関係、親族関係で

ある。そして、三つ目が、権力関係というものが孕む緊張感・流動性である。ヨーロッパ権力は、下流と上流の関係、スルタンとその支配下の人々の関係を、ヨーロッパにおける君主と領土・家臣との関係になぞらえて理解し、前者の後者に対する圧倒的支配を想定していた。しかし、東南スマトラでは、支配関係は、親族関係のイデオロムが示唆するように、ある種の相互依存関係であり、両者の間の不断の交渉・妥協・攻めぎ合いを意味していた。

アンダヤの扱う時期において、上の文化的メッセージにダイナミズムを付与した触媒は、東南スマトラの上流で栽培され、下流から国際市場に出荷されたコショウであり、のちにはスマトラ本島外で産出されたスズである。ジャンピ、パレンバンはもちろんのこと、バンテン、マタラム、ミナンカバウ、ブギス、ジョホール、そして「外来」の中国人商人さえもが、基本的に在来の文化的メッセージないしルールに則って「ゲーム」に参加していたのに対し、この状況はイギリス、オランダの到来によって様相を異にするにいたる。これ以降、「文字の文化」が「声の文化」に対し徐々に影響力を強めていくようになるわけであるが、しかし、アンダヤの扱う時代においては、この影響力はいまだ決定的なものとはなっていない。であればこそ、この時代の歴史過程が、「声の文化」の側からみてどのように了解されたのかという、アンダヤの研究関心が生きてくるのである。

本書の目次を紹介すると、以下の通りである。

Introduction

Chapter One Writing and Speaking: Approaching the History of Southeast Sumatra

Chapter Two Families and Exchanges: The Seventeenth-Century Pepper Trade

Chapter Three Accounts and Reckonings: Upstream-Downstream Tensions and Jambi-

Palembang Rivarly

Chapter Four Rulers and Memories: Good and Bad Times in Palembang and Jambi

Chapter Five Contracts and Obligations: Upstream-Downstream Relations in Eighteenth-Century Jambi

Chapter Six Kings and Heroes: Sultan Mahmud Badaruddin of Palembang (1724-1757)

Chapter Seven Descriptions and Judgements: Southeast Sumatra in a Time of "Decline"

Conclusion To Live as Brothers

私自身、歴史家でないということもあってか、この本を大変面白く読んだ。しかし、歴史家の一部には、現時点で集められた民話の利用など、「文化的メッセージ」を抽出する方法、さらには抽出されたものの妥当性などについて、疑問を感じる人も少なくないであろう。私の感じた不満は記述の仕方である。全体の本の構成、そして各章の構成は、まず最初に「文化的メッセージ」ないしテーマの概述があり、その後の本文において概述を肉付けする形で記述が進行していく。さらに、各章、著書の最後においてまとめがなされている。東南アジア史における新しい試みを、できるだけ多くの人に説得的に叙述したいという思い、あるいは「声の文化」の叙述形式を意識的ないし無意識的に踏襲した結果が、こうした懇切丁寧な記述の仕方につながったのかもしれない。しかし、この記述形式は、「文字の文化」に慣れた私にはいささか反復が多く、煩雑に感じられた。

いずれにしても、私にとっては、アンソニー・リードのマクロな歴史の再構成の試みとは違った意味で、新しい東南アジア史の可能性の到来を告げる非常に刺激的な本であった。

(加藤 剛・東南ア研)